

ポツポのおつかい



作：近藤せいけん



ブタのポッポは川の近くのりんご畑にお母さんと、妹のクウクウと住んでいました。

ある日のことお母さんから、お使いを頼まれました。

青い森に住む、お母さんの弟、ポッポから見るとおじさん。グラグーおじさんの家に、おいしく焼いたアップルパイと、りんごを届けるように頼まれました。

「はい、いいよ。この前お母さんと一緒にいったから、道は大体解かるから、だいじょうぶだよ」

ポッポは初めてのお使いに、はりきっていました。

妹のクウクウが言いました。

「グラグーおじさんの家に、私も一緒に連れて行って」と騒ぎ始めました。

「クウクウ、おまえはまだ小さいから、無理よ。家で遊んでなさい」

すると妹のクウクウはだだをこねて、聞きません。

「やだ、やだ、兄ちゃんで行く、行く、連れて行って」

ポッポは困ってしまいましたが、クウクウに言いました。

「クウクウ。青い森にゆくまで、いたずらきつねや、怖いオオカミがいるところを通り、怖い思いをするかもしれないんだよ」

「クウクウは、お兄ちゃんと一緒になら怖くないもん。大丈夫だよ。大丈夫」

「お母さん、どうしょうか？」

「うん、困ったわ・・・」

「クウクウ、いい子にして、お兄ちゃんのゆうこと、ちゃんと聞くから、お願い」

結局、優しいポッポは、クウクウを連れてゆくこととなりました。

ポッポがアップルパイと、りんごを、リュクサックに入れ肩にかつぎ、クウクウと手をつなぎ、青い森のおじさんの家をめざして、出発しました。

今日は朝からよく晴れて、気持ちのよい青空が広がっていました。

「うれしいな、うれしいな、お兄ちゃんと一緒に、うれしいな」

「おいしい、おいしい、アップルパイとりんご、おいしいよ、おいしいよ、」

「青い森へいくんだよ。おじさんの家にゆくんだよ。ホイ、ホイ、トントン」
と歌をうたいながら、村の小路を歩いてゆきました。

途中でかっこう鳥のおじさんに会いました。

「カッコ～カッコ～青い森に行くのかえ、きつねやオオカミに気をつけるんだよ」

「うう～ん、気つけるよ。ありがとう」

家を出る前に、お母さんに「きつねやオオカミがもし、悪さをしかけたら、このアップルパイをおあげ」

「こちらのアップルパイはきつねに食べさせんですよ。

たっぷりからしを入れてあるから、食べたら、飛びあがって逃げていってしまうからね」

「もう一つの大きいほうのアップルパイはオオカミにあげなさい、フクラシ粉がたくさん入っているから・・・」

用心のために、お母さんが作ってくれた、きつね用、オオカミ用のアップルパイを入れ、リュクサックは重たくなっていました。

ポッポはきつねやオオカミに会わないといいな、と思いながら小川のところまで来ました。

ふくろうの兄弟が鳴いています。

「ぼ、ぼ、ぽぽ～この近くにいたずらきつねがいるぞ～気をつけろ、気をつけろ、白きつねがいるぞ～ぼ、ぼ、ぽぽ～いたずら、いたずら、きつねだよ」

小川を渡る、小さな橋がかかっています。

ポッポとクウクウが小さな橋を渡ろうとしたときです。

突然、白いきつねが出て来ました。

「エ、へ～ん、ここは橋の関所じゃ、わしは番人じゃ」

「これこれ、どこにゆく」

「これ、あやしい臭がするぞ！そのリュクサックの中を調べる」「さあ、中を見せろ～」

ポッポが言いました。

「青い森に住む、おじさんに届けもにゆきます」

「中身は、お母さんが焼いたおいしくアップルパイとりんごです。」

「けしてあやしいものでは、ありません」

「いや、いや、あやしい、調べる。そのリュクサックから品物を出せ。早く、早く」

きつねは、いいにおいのするアップルパイが食べたくて、食べたくてしょうがなくなりました。

ポッポがリュクサックを置き、お母さんから言われた、アップルパイを取り出しました。

「さあ、きつねの番人さん、本当のアップルパイでしょう。よく見て下さい」



「どれ、どれ、拝見しよう」

きつねはアップルパイを手に取り、しげしげとながめました。

「とても、あやしい、一口食べてみよう」とパクと大きな口に入れ、飲み込んでしまいました。

さあ、大変。

「うわ！ 身体の中が火事じゃ。うわ、うわ、からい、げきから。助けて！
うわ！」

いたずらきつねは慌てて、にげてゆきました。

「さあ、橋を渡って、青い森に急ごう」

「お兄ちゃん、よかったね。悪いきつねは行ったし」

また二匹は元気をつけるために歌をうたいながら、歩きました。

「青い森、青い森、もうすぐだ。おじさん、おじさん、待っててね、待っててね、ポッポとクウクウがいきますよ」

「ランラン、ランラン、楽しいな、楽しいな」

青い森の入り口にさしかかりました。

たくさんのハトが木の上にいました。歌っています。

「近くに怖い、怖い、オオカミがいるぞ、気をつけろ、気をつけろ、オオカミだよ、オオカミだよ、お腹かをへらしているぞ、気をつけろ、気をつけろ、おお怖い」

クウクウは心配になり、ポッポに話しかけました。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、ハトさんたちが教えてくれているよ。怖いオオカミがいるって。どうしよう、どうしよう」

ポッポは怖いですが、勇気を出して。

「ダイジョブ、ダイジョブ、お母さんが作ってくれた、オオカミ用のアップルパ

イがあるから、ダイジョブ、ダイジョブ」

といいながらまた歌を歌いながら、進みました。

「ドンマイ、ドンマイ、もうすぐだ。おじさん、おじさん、待っててね、待っててね、ポッポとクウクウがいきますよ」

「ランラ、ラン、ランラ、ラン、楽しいな、楽しいな、ドンマイ、ドンマイ、ポッポとクウクウだよ」

すると、突然。

「うるさいぞ、だれじゃ、俺さまの眠りを妨げたのは」

「そこにいるのは、誰じゃ」

大きな黒いオオカミがあらわれました。

「うわ～あ、オオカミだ。どうしょう・・・」

「おまえたちか、おれさまの眠りを妨げたのは、けしからん。とてもけしからん。プンプン、プン」

「なんじゃ、なんじゃ、このいい、においは、クンクン、クン」

「そのリュクサックからか・・・その怪しいにおいのもとをここに出せ。よいな～」

「はよう、はよう、出せ。出せ」

ポッポはリュクサックからアップルパイを取り出した。

「エヘン、よし、よし、どおれ～食べてしんぜよう。エヘン、ポイ、ポイ」

「いい、においじゃ、オホホ、ホホ、エヘン、ポイ、ポイ」

黒いオオカミは大きなアップルパイを一口に飲み込みました。

「うむ、まあ、まあ、じゃ。うまい」

「もっと、あるじゃろ。出せ、出せ～」

大声を出している、少しづつお腹がふくらんできました。

「あれ、あれ～変じゃ、変じゃ、お腹がふくらんできた、ドンドン大きくなる。うわわ、わあ～大変、大変」

「どうしょう、どうしょう～」

ポッポとクウクウは歌います。

「大きくなれ、大きくなれ、お腹よふくれよ。ふくれよ。ドンドン大きくなれ、ドンドン、ドンドン。モット、モット大きくなあれ、ドンドン、ドンドン」

黒オオカミのお腹はパンパンにふくれ上がりました。

すると、風船のように浮かびはじめました。

「わあ～何だ！何だ！身体が浮かんでいる。誰か、助けて！お願い、助けて～」
黒オオカミは風に乗れ、遠くまで飛ばされてゆきました。

「わあ、これで安心。よかった、よかった」

「さあ、行こう、グラグーおじさんの家はもうすぐだ！」

「ドンマイ、ドンマイ、もうすぐだ。おじさん、おじさん、待っててね、待っててね、ポッポとクウクウがいきますよ」

「ランラ、ラン、ランラ、ラン、楽しいな、楽しいな、ドンマイ、ドンマイ、ポッポとクウクウが着きますよ、着きますよ、」

グラグーおじさんの家が見えてきました。

ポッポとクウクウの歌声を聞いて、おじさんが庭にでできました。

「ポッポとクウクウじゃないか、よくきたね。本当によくきたね。途中、怖く
なかったかい。それにしても兄弟だけで。エライ、エライ」

「おじさん、途中できつねと、怖いオオカミに出会ったの、お母さんが作ってく
れた、アップルパイでやっけたの」

「そうか、本当にがんばったね。よし、帰りはおじさんが一緒に送るよ」

ポッポとクウクウの初めてのお使い、お母さんがおいしく焼いたアップルパイと
りんごを、グラグーおじさんに届け、無事終わりました。

それからのち、いたずらきつねも怖いオオカミも二度と出てこなくなりました。